

庭野光祥
立正佼成会次代会長
Kosho Niwano
President Designate of Rissho Kosei-kai

「平和のための祈りの集い」20170910 ミュンスター
立正佼成会 庭野光祥

ダイアログ 2.0 ～平和への道～

私たちは昨年アッシジで、「平和のための祈りの集会」の 30 周年を祝い、今年 8 月には日本の宗教者がアッシジの精神を継承する形で始められた比叡山宗教サミットも 30 周年を迎えました。そして今、かつて対立から対話への大なる転換がなされたこの地で、31 年目のこの時を皆さまと共に迎えられることを心から感謝申し上げます。

第一回比叡山メッセージに「我々の使命はあまりにも大きく、我々の力はあまりにも小さい。それゆえ我々はまず祈りから始めなければならない。」とある通り、この 30 年、世界各地で諸宗教による平和の祈りが捧げられてきました。

また、諸宗教の対話を推し進めた先達も多く存在します。例えば、第二バチカン公会議を開かれた教皇ヨハネ 23 世、そしてその後を継がれた教皇パウロ 6 世によって、それまで「対立するもの」だった宗教は、「対話するもの」へと舵を切りました。

2500 年前、釈尊は「ある人々は真理であるというのに、他の人々はそれを虚構であるという。このようにして人々は偏見のもとに言い争う。信仰の道にある人々が、なぜ同一のことについて語り合わないのだろうか」と語られました。

私の祖父・庭野日敬も、微力ながら、宗教対話による世界平和に献身した宗教者の一人です。1965 年、第二バチカン公会議に招待され、教皇パウロ 6 世の言葉に感動すると「自分の宗派・宗教のためだけを考えている宗教者の使命を達成できない。これからはすべての宗教を結ぶ懸け橋となろう」と決意。「宗教協力などナンセンスだ」と批評されながらも、「宗教の対話と協力なしに世界の平和はあり得ない。対話の場を作らなければいけない」という信念で、1970 年、京都で第 1 回世界宗教者平和会議を実現しました。

そんな祖父を見て育った私にとって、宗教とは協力しあうもの、宗教対話とは平和のための具体的な行動を意味します。

宗教指導者たちは、その後も互いの宗教・宗派を尊重し、真剣に対話を重ね、今や宗教の対話は世界の潮流となったのです。

しかし残念なことに、現在、世界はまた互いに対する無知や疑い、恐れによって分断され、対立へと突き進んでいます。私たちは先哲の歩みを受け継ぐと共に、今必要とされている対話とは何かを問い直し、対話のOSをアップグレードしなければなりません。

対話は単なる「おしゃべり」ではなく、自分とは異なる存在とのやり取り、違いを違いとして認めつつ、異なる価値観との出会いから生まれる“矛盾や葛藤を乗り越えようとする意志”を持つ交し合いです。

対話をアップグレードとは、世界に変化をもたらすために、すでに存在する境界を捉え直し、動かすこと。それぞれの宗教伝統の〈本来〉に目を向け、共通の善を見出し、世界を再編集することです。自分たちのための文化から他者のための文化へと変化させることです。

対話をアップグレードしたいと願う私の強力なパートナー、聖エジディオ共同体のアルベルト・クワトルッチ事務局長は「対話は『成熟した』ものにならなくてはならない。他者を許し、尊敬するだけでは足りない。平和を建設するために、共に行動しなくてはならない。」と言います。

私たちは今、この言葉を行動に移しつつあります。昨年11月、聖エジディオ共同体と立正佼成会は、アフリカの新しい世代の平和と幸福のために共に行動を起こすための調印式を行いました。私たちは、国も宗教も歴史も成り立ちも異なりますが、それは障害にはなりません。なぜなら人類の目的は一つだからです。私たちを隔てていると思いついていた境界を乗り越え、他者のための文化、人類のための対話へとアップグレードしたのです。

私たちはまず、マラウィでの HIV 感染者やエイズ患者の健康状態の改善と、エイズウイルスの母子感染の予防のためのサポートである DREAM プロジェクト、社会保障や保険、教育システムへのアクセスを可能にする出生届の推進を図る BRAVO プロジェクト、そして少年兵や児童婚、臓器売買から子どもたちを守るた

めのサポートを始めました。

今、多くの人が「伝統」は力を失い、「革新」はリスクーだと考えています。けれど私たちが活動する場所は「伝統」か「革新」のどちらかではなく、いつもその〈あいだ〉にあります。「伝統」と「革新」の〈あいだ〉、「理想」と「現実」の〈あいだ〉、「あきらめ」と「気負い」の〈あいだ〉にあるのです。その〈あいだ〉にある小さな領域をどのように再編集できるかが問われているのです。〈あいだ〉にあるのは境界「線」ではなく、「幅」を持つ「領域」です。それは田んぼに植える前の稲が育つ、苗代のような場所です。

私たちの歴史が間違いを繰り返してきたのなら、いまこの瞬間から歴史を綴り直しましょう。世界を再編集し、新しい歴史を綴るのは“誰か”ではなく、今ここに立つ私です。もちろん、世界は簡単には変わりません。だからこそ、私たちが生きる社会の中に小さな対話の領域（苗代）を作り、育てましょう。その場所はやがて青々とした苗を育み、平和へと続く、豊かな実りのマザーになるはずです。

祖父はこう言っていました。「理想は、完全にそこへ到達した時に初めて実現するものではなく、そこへ向かって踏み出す第一歩から既に始まるものだ」と。

対話のアップグレードとは、境界を問い直すことから始まる編集であり、世界の仮説、可能性です。でもその編集可能な小さな苗代から「平和への道」が始まるのだと私は信じています。